

熊本地震3カ月報告会

防災学術連携体 と日本学術会議 現地の調査結果

防災学術連携体はこのほど、日本学術会議と共催の「熊本地震3カ月報告会」を開催した。写真Ⅱ。連携体を構成する約30学会のうち、25学会の代表が現地調査結果を報告した。

土木学会からは京都大学大学院工学研究科の高橋良和准教授が、橋梁を中心とする土木構造物の被災状況を紹介。九州自動車道では、本震の震源に近かった木山川橋で、鋼製の連結坂や支承が数

されるのが一般的で、自治体の人材不足が指摘される中、耐震補強などの対策が遅れる可能性もある。同准教授は「選択と集中の考え方で、橋の撤去を考える必要がある」と指摘した。

また、日本集団災害医学学会から国立病院機構災害医療センターの近藤久禎政策医療企画研究室長が、九州内のホテルや旅館に一時的に避難する「リフレッシュ避難」の有効性を説いた。

巨大な上下動に見舞われたと考えられる。課題を示したのは、鉄道や高速道路に架かる跨線橋、跨道橋。国が整備しても、完成後のメンテナンスは自治体（都道府県）に移管

